声よとどけ

俺の目をみろ何んにもいうな　男同志の腹のうち
ひとりぐらいはこういう馬鹿が　居なきゃ世間の目はさめぬ

神領運輸区全社員のみなさん、長い間お世話になりました

９月１９日、1013Mで金山駅構内において、速度照査ＡＴＳ動作により、乗務を降ろされ、残念ながら会社の判断により再乗務不可となりました。 名古屋運転区から神領運輸区に転入して２０数年、乗務員歴３０年あまりこの仕事をしてきました。
神領転入当時職場は問題にあふれていました。職場環境、運転事故の対応など問題は山積みでした。 ささいなミスで乗務停止の乱発、ミスをすれば大声で現場長をはじめ管理者から罵声をあびせられていました。希望にあふれた新会社ＪＲはこんな会社 だったのかと多くの社員は落胆していました。問題を解決しなければならない組合は、本来の役割を忘れ会社の方ばかり見ていました。八方ふさがりの状態であった当時の神領分会はとにかく組合員の声を聞くため、あらゆる手段を使い、飲み会やキャンプなどレク活動などできるかぎり組合員の声を聞く努力をしました。するとその場に今度は助役などが顔を出すようになり、その場の会話が会社に知れるところとなり、後で呼びつけれ話の内容を問いただされるなど、圧力をかけられしだいに職場は暗くなっていき、息が詰まるような状態でした。まさに今の神領運輸区の状態そのものでした。それをうち破ったのは組合員の怒りの声でした。

事故を起こした運転士が長期日勤のすえ駅に配転になったことを契機に組合員の怒りは頂点になり、最後の手段として本部委員長を分会の集会にわざわざ招いて、一気に組合員の声をぶつけました。そのような声に動かされ、一部の役員が会社ばかり見ている組合役員や社員の苦労に答えない現場長に堂々立ち向かってゆきました。最初は不安でしたが組合員の声がバックとなり自信となりました。しかし私たちの声は届きませんでした。

やがて、しだいに組合の役員人事まで会社の意向が露骨に現れてくるようになり。このままいくと労働組合としての役割が終わってしまう危機感から、新たな組合現在の東海労を結成しました。私たちの結成のルーツは理不尽な現場管理者との闘いでした。

ユニオンの組合員のみなさん、今の神領の現状は東海労結成の時期と全く同じです。この現状をうち破るにはユニオンの中で声を上げているだけでは解決されません。
行動しなければ何も解決されません。今一番の解決策は東海労へ結集することです。

私たちは当時のようにみなさんの先頭で闘います。　　何があっても！
今私たちはあえて言います、　声よとどけ！

平成20年　12月 5日　東海労神領分会　堀部　肇